

特集「英語教育はどうあるべきか」Part 2

言語材料の内容とその取り上げ方

あなたの授業のパターンは何ですか？

見上 晃

(東洋女子短期大学教授)

1. はじめに

授業について話をする機会があっても、「あなたの授業のパターンは？」と聞かれて、すぐに答えられる人は少ないだろう。これに即答できる人は何か特定の教授法を信奉されている方ではないだろうか。たいてい「自己流ですが導入はオーラルで…」のように説明してくれる。当然、学習者のレベルや興味は先生ごとに異なる。つまり、先生ごとにまたクラスごとに授業の形があるということである。

このような自分流の授業パターンをお持ちの先生方にとって、教科書がある特定の授業パターンを押しつけるものになっていると不都合であろう。NEW CROWNの教科書作りは、このことを頭に置いて行われた。したがって、本課にはある教え方しかできないといった内容は置かないことにした。特定の授業パターンを押しつけないというのは大事なことで、先生方が授業研究を行い、ご自分の授業をより良いものにしていく努力を妨げないということにもつながると思う。

2. 基本的な考え方

ある人に言語材料の配列がナチュラルオーダーになっていないと言われたことがある。私にナチュラルオーダーハイポセシスについて質問した人は、学習者が自然に学習する順(ナチュラルオーダー)に教えるのがよいと言っていたが、私の理解では、ナチュラルオーダーハイポセシスとは「教える順序がどうであっても、学習者は一定の順に学習していく」というものである。つまり、教える順序はどのようでもよいと理解している。そこで、学習者にとって理解しやすいと思われる言語材料の配列順序を考えた。易しいものから難しいものへと並べるのは当たり前だが、何が基本で何が易しいかの判断がなかなか難しい。具体的な配列は、学習の容易さと指導の容易さを重んじる観点か

ら、現場の先生方のご意見をお聞きしながら編集委員会で決定してきた。

さらに、コミュニケーション能力の基本を理解してもらうためには多少の遠回りがあっても仕方がないと考えた。たとえば短縮形については、コミュニケーション活動を行う場合に自然と身につくものとは考えるが、まずは縮約させない形をきちんと教えて、理解が行き届いたところで短縮形を提示することにした。短縮形そのものは特に用いる必要はなく、英語をある程度の速度で発話していけば、英語のリズムが身につく、その結果として短縮形は身につく。無理に遅いスピードで短縮形を発話するようなことにならないよう、また Yes, I'm. といった誤用が行われないよう配慮した。

3. 言語材料の扱い

教科書構成

NEW CROWNでは、言語材料の扱いは二重構造になっている。本課本文(LESSON/LET'S READ)で基本となる文法項目を学習し、LET'S シリーズ(LET'S TALK/LET'S LISTEN/LET'S WRITE)でこれらを活用・応用する。LET'S シリーズは4技能のそれぞれを集中的に練習し、言語学習だけでなく、言語習得に結びつくように配慮した。このことで、十分な時間がない場合には、本課本文だけを学習すればよいという学習方法をとれるようになった。また本課本文では、会話が行われる状況がわかりやすいように、できる限り説明や補助的な画像教材を付けるように配慮した。

教科書のページでは、どのような順で学習してもよいように、言語材料のポイントはページ下部の脚注に置いた。提示する例文は、本文中の文を用いたが、その文が難しいと考えられる場合には別の文を準備して、説明が容易になるような配慮をした。説明は、必ず既習の事項との対比で、どこが新しいかを示すようにした。説明の中では、

既習の単語のみ用いるようにしている。また、学習の便を図るため、各セクションのポイントのほかに巻末には「文法のまとめ」を準備してある。この「文法のまとめ」は、学期の途中でのまとめとしても使えるし、各授業の補助としても用いることができる。例文も、本課本文と同じにはしなかった。自習用としても使えるように、説明を加え簡単な問いも用意した。また、必ずしもここをやる必要がないことを示すため、「文法のまとめ」からは本課本文のページがわかるようにはなっているが、本課本文には「文法のまとめ」のページを入れないようにした。文法については、コミュニケーションが学習の中心となってから軽視されている感があるが、日本人学習者が英語で考える手がかりを持たない場合には、ひとつの拠り所となる。NEW CROWNはこの文法の大切さを考え、ていねいに提示し学習が容易になるよう配慮した。

配慮した事項

細かい点だが、教育的に配慮したことがいくつかある。まず、動詞の導入はbe動詞で行った。実際の教室内の活動で、This is ~. / Is that ~. / What is this? など、身近な例を使うのにbe動詞のほうがいろいろな例を出せるからである。一般動詞だと、ひとつの動詞の意味が特定の動作などに限られる。また、現在形から入るため1人称や2人称を使った発話で、一般動詞では使いにくいということもある。なお、一般動詞の導入があまり遅くなるのはよくないので、4課ですぐにhave, likeなどを導入している。

<コンマとピリオド>

一般的にアメリカ英語では、MrやMrsの後にピリオド、tooやeitherの前にコンマを打つが、イギリス英語では、いずれも省略されることがある。また、いずれも新聞・雑誌においては紙面節約のために省略されることがある。NEW CROWNでは学習者の負担軽減と学びやすさの観点から、これらを省略する表記を選択した。MrやMrsのあとにピリオドがつくがMissにはつかないので、学習者には覚えにくい。tooやeitherの前のコンマも、ほかの副詞との違いは何かなど複雑になる。以前にイギリス人の先生とこの話をしたとき、「そのやり方は私と同じだ」と言われたことがある。個人差で使い方が異なる程度のものを無理

に強要することはない。どちらでもよいことについては、できるだけ簡単なほうを選択し、学びやすいものにした。

<フォニックス>

フォニックスも部分的に採用したが、本来フォニックスは、英語を母国語とする学習者に綴りのルールを教えるものである。発音そのものが身についていない日本人学習者が、必要なものを学習の進度に応じて学習できるように、最初にすべてを配置することはやめた。すべてのルールを同時に教えることは、学習者に過大な負担になり、ルールを記憶することに集中して、実際の発音が身につかないようでは困るからである。

<過去形>

過去形の導入についても少し無駄をした。1年の最後で規則変化の動詞を、2年の最初に不規則変化の動詞を導入した。このことにより、2年の1課で復習をして、さらに不規則変化へと移ることができる。実質的に、3つの課を使って過去形について学習しているので贅沢な配置といえる。

<不定詞>

不定詞は副詞用法から導入した。既習の前置詞toの意味に関係づけることにより、理解しやすいと考えたのである。toの原義は「方向・到達点・目的」に関するもので、前置詞toの表す意味と同じである。この意味は、不定詞の目的用法の中に隠れていると考えられるため、ここから導入したほうが学習者も自然に理解しやすいと考えた。

<受け身>

前版(平成5年度版)で、教科書での導入の時期が早すぎるとご指摘をいただいた受け身は、現行版(平成9年度版)からは、過去形の不規則変化型の導入から離れて、前版より遅い位置に配置した。このことにより学習者の負担は軽減したものと考える。また不規則変化をする動詞のほうが、過去分詞をはっきり意識でき、過去形と誤解をしないと考え、導入の動詞は不規則変化型の過去分詞を用いた。また受け身では、「視点をかえている」ことを強調するため、byのない形を最初に出すようにした。能動形と同じ意味の文ではなく、視点が変わることを表現した別の文と位置づけている。受け身形が選ばれるのは、行為者よりも行為を受ける対象に視点や情報価値があり、行為者は

不明や問題にしない場合が多い。したがって、通常の受け身はbyのない形といって過言ではない。
<現在完了>

現在完了は継続用法から導入している。現在完了は特定の時制を表すものではなく、過去から現在までの時制のつながりを現在の視点から見ている、という現在完了の本質を理解するには、過去からはじまり、現在も続いているという継続用法が最も適切と考えた。継続・完了・経験をあまりに明確に区別することは本質的に無理であり、継続・完了・経験が混ざり合っていると考えるのがよいと判断してはいるが、教科書では、それぞれにひとつのセクションを割いて説明をしている。

<関係代名詞>

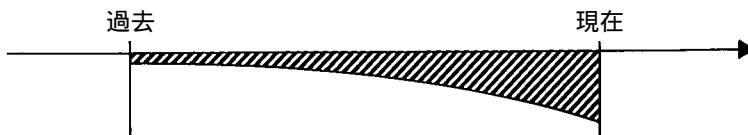
関係代名詞の導入は that からとした。that は先行詞が人にも物にも使えるという利点があり、使用範囲が広い。また格変化もないので、学習者の負担は少ない。そこで最初に that で関係代名詞に慣れてもらってから、その他の関係代名詞 who, which を導入している。

4. おわりに

全体として、どんな授業パターンにも対応できる構成を目指した。生意気なことをいわせてもらえば、授業パターンをお持ちでない先生方には、どう扱ったらよいか悩まれることもあるかもしれない。このような場合には『Teacher's Manual』を参考にさせていただきたい。『Teacher's Manual 授業案集』では、いくつかの例を示している。そこから最適と思われるパターンを選び、これにあてはめたり、組み合わせたりして授業を構成されることをお奨めする。「生きる力」を育て「考える力」を養うことが、NEW CROWN の普遍的課題である。『Teacher's Manual』には、いろいろな情報が詰まっている。ご活用いただければ幸いです。

言語材料を中心に教科書について述べたが、先生方が利用する場合の参考になればと思う。もし、お会いする機会があれば、先生の授業の形について是非教えていただきたい。どんな授業パターンにも合う教科書を作っていきたいから。

現在完了形



I have lived in Yokohama for two years.
「横浜に2年間住んでいます。」 [継続]



I have just finished my homework.
「宿題を今終わったところです。」 [完了]



I have visited Hiroshima twice.
「広島を2度訪れたことがあります。」 [経験]

過去に始まって現在に
まで関係しているよ。

